様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　　5月　24　日現在

機関番号：10101
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009 ～　2011
課題番号：21520310
研究課題名（和文）　ヨーロッパと『イリアス』理解の研究

研究課題名（英文）　Understanding the Iliad and the identity of Europe

研究代表者
安西　眞（ANZAI MAKOTO）
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90143320

研究成果の概要（和文）：
『イリアス』はギリシア最古の叙事詩である。ルネサンス以降の「ヨーロッパ」人は、ギリシアを文化的な「父」と設定し、ヨーロッパという概念の中核として使った。そのことはギリシア最古の叙事詩研究を長期にわたって盛んなものとしてきたが（もちろんヨーロッパで）、同時に、同叙事詩理解を妨げてきたことも否めない。本研究は、研究代表者が、ヨーロッパ文化伝承の外にあるという自覚をもってすれば、従来ヨーロッパ人であるが故に理解を妨げられて部分に光があてられる、ということを示そうとした。その成果は着実に上がりつつある。

研究成果の概要（英文）：
The *Iliad* is the oldest epic poem produced in Ancient Greece. Since the Age of Renaissance Europeans have thought the Greeks their “cultural father” and have exploited the Greece as a central term to fabricate the notion of united community of Europe. This exploitation has made the Homeric study one of the central subjects in humanities in Europe but at the same time made some crucial parts of Homeric Poems difficult to see from a proper viewpoint. In this 3-year project the researcher has tried to show that if a researcher who is out of the tradition of Europe challenged these crucial difficulties with conscience that he is “an outsider” of the tradition, he could contribute greatly on Homeric studies. And I believe the trial is going to be successful.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：西洋古典学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学
キーワード：ヨーロッパ、アジア、『イリアス』、古典文学の社会的価値、

１．　研究開始当初の背景

⑴ 日本はもちろんのこと、欧米の業績の間でも、ホメーロス叙事詩に、ギリシアとアジアの区別がまだ成立していないことことが、ほとんど自覚されていなかった。特にホメー

ロス叙事詩のうち、後のギリシア人と重なるアカイア勢と、のちのアジア地域に成立した民族的集団とも思えるトロイア勢とが、正面から生存を賭けて戦う『イリアス』については、その自覚のなさが、直接理解の根底に関わる分だけ、この無自覚が重大な影響を持ってきたと言える。

⑵　また、自覚し、その事実を知っているとを、様々な形で表明してきた人たち（たとえば、M.I.Finley, E. Hall, J. Romilly ら）も、その事実が同叙事詩の理解を根底から変えるものだとは理解していなかったし、かえなければならないと考えていなかった。もちろん、『イリアス』を、国境線未成立の状態で理解する作業に手を付けることもしていなかった。

⑶　従って、これまでの『イリアス』研究あるいは『イリアス』理解は、日本語でなされたものであれ、英語その他の欧語でなされたものであれ、次のような大きな欠陥を内包してきたものだと言える：『イリアス』内に、アカイア勢とトロイア勢という区別は成立していても、それは全く民族・人種的区別ではなく、単なる地理上の集団区別でしかなかったのに、それを多かれ少なかれ、古典期（おおよそ紀元前５世紀）以降に成立する、民族的・国家的区別を時代錯誤的に持ち込む形で、それらのすべての学問的な成果は成立してきたものだという欠陥である。

⑷　ただし、ここにひとつ難しい問題がある。それは、叙事詩としての『イリアス』が、長く複雑な成立過程を持っており、と同時にそれに要する長い時間を必要としてきた、という事実である。というのは、私たちが持つ同叙事詩の中世写本をそのまますべて同叙事詩の全体として認めると、国境線はまったくなかったとは言えないからだ。ただし、この言及を含む詩行はあきらかに口承叙事詩としての『イリアス』の成立・固定の後に本文に付加された異分子である。

２．　研究の目的

⑴　『イリアス』が、国境線なくして成立した大叙事詩であるのにもかかわらず、国境線がそこにあるかのごとくに読まれてきたのだという事実を指摘することが、この研究の目的であらねばならない。

⑵　一方、国境線があることを認めた研究がこれまでなされてきたことには、ある種の「事実的根拠」が、まったく無いわけではない。ごく少数の、詩行が、口承叙事詩としての『イリアス』が文字によって固定化した後に叙事詩本文にまぎれこんだ挿入文である（１−⑷参照）。これらは、叙事詩の全体と矛盾する。この矛盾を指摘して、その事実を認めると、『イリアス』の全体がどのような構造によってできているかを明らかにすること。と同時に本研究が対象とする『イリアス』とは口承伝承の最後にある種の終着点として到達されたものだという意味での「最後の『イリアス』」であるという、本研究の立脚点もあきらかにしておく必要がある。

⑶　その上で、異分子と紛れ込んできたものを、指摘し、「最後の『イリアス』」を解明する上での異分子であることを指摘しなければならない。

⑷　そのような異分子を排除した後に見える『イリアス』がどのような意味で文芸としての構造を持つかをあきらかにしなければならない。言うまでもなく、この部分が本研究の主要部分をなす。

⑸　今後も、『イリアス』理解が重要な意味を持つのは、多く、欧米に於いてであるから、この種の研究者にも、成果が判断でき、今後の研究に使えるような形で、この成果を公表すること。具体的には英語で本研究の主要な成果を公表すること。

３．　研究の方法

⑴　本研究の目的そのものが、polemical なものである。従来の前提がある誤りを含んでいれば、作品の部分の理解、あるいは読み方に、ある種の誤読として表れる。これを明らかにする論文を発表し、あるべき「読み」をあたらしく提示して行く。

⑵　しかし、本研究は、従来の古典研究を、すなわち、ギリシア・ローマの古典を理解する為の本文理解の、どのように主要な一部であっても、一部を改訂する試みである。方法としては、伝統的な文献学的方法に立脚したものでなければならない。たとえば、１−⑷にいう異分子を指摘する場合でも、その指摘の基礎は、言語としてのギリシア語の理解の問題として、また、その部分が含まれた文脈の中での、その異分子と目される部分の文脈上での機能の問題として追求されなければならない。『イリアス』は、ヨーロッパという概念が成立し、ヨーロッパ人のアイデンティティーを維持する大きな文化的根拠として機能してきた。こういう事情が欧米の『イリアス』研究を「ゆがめて」来たという洞察が、この研究の出発点である。しかし、あくまでも本研究は、従来の『イリアス』研究が持っていた、以上のような『イリアス』の文

化的機能故の過誤を修正するのが目的である。また、その上で『イリアス』理解を促進したいという目的を持っている。従って方法はあくまでも伝統的なものであることを逃れることができない。

⑶　あたらしい構造の提示については、これらの成果を待って、その新しい理解による部分的理解と、従来の基本的な考えのうち、容れられるものを、考量し、像の作成・提示を試みる。具体的にはこうである。従来の『イリアス』構造理解としては、W. Schadewaldt による、理解が最も優れたものとして定評がある。それが優れたものであることは、本研究社も認める。また、それが、まとまったものとしては唯一のものであることも本研究者は知っている。従って構造の解明も、この Schadewaldt によるものを、いったん解体したうえで、改訂するということになる。

４．　研究成果

⑴　２-⑴、２-⑵、２-⑶については、日本西洋古典学会の欧文誌創刊号に掲載された論文（雑誌論文１、２、３参照）、および、韓国の Greco-Roman Society からの招待公演を文字化する論文（2012/11 公刊、なお学会発表３参照）で、いちおう形としては、十分以上に達成したと言える。特に、目的のうち、『イリアス』という作品の中に国境線が含まれていないという問題については、研究が始まる前に予想していたよりも、文芸としての問題として考えればはるかに複雑な問題を含んでいることが判明したので、ヘシオドスのいわゆる「鉄の時代」とは何か、あるいは同詩人の言う英雄時代とは何か、あるいはまた、何故彼の「世界文明史」に何故英雄時代という時代が含まれるかの解明という、重要な副産物を生み出した（図書２に含まれる安西眞、「英雄時代と鉄の時代−ヘーシオドスのギリシア社会史」、　163-190 参照）。

⑵　２-⑷については、最終的な構造提示は、『フィロロギカ』に発表した論文でできたが、最終的な、いわゆる証明に該当する部分の重要なひとつの要素が未完のままに終わった。また、もちろん、その部分については、２-⑸に該当する成果も得られていない。研究期間外ではあるが、2012/10 に行う予定の渡英（Edinburgh）で実行を始める予定であり、同成果を待って、邦語による著書の形での「『イリアス』叙事詩とヨーロッパという概念」およびその英語版の完成を追求したい。この研究をつうじて、Edinburgh 大学古典学・歴史学主任教授である、Douglas Cairns 氏が、その完成に向けて、大いに興味を持ち、また、英語の校閲や、英国での出版に関して全面的な協力を申し出て下さっているのも非常に心強い。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

①　安西眞、アキレウスの盾の描写とアキレウス、フィロロギカ、査読有、５巻、2010, 46-68

②　Makoto Anzai, Tetsuro Watsuji as one of the Pioneering Classicists in Japan and the *Iliad*, Japan Studies in Classical Antiquity, 査読有、１巻、43-61

③　安西眞、　英雄叙事詩を演じる英雄：*Iliad* 9.182-95、フィロロギカ、査読有、７巻、2012, 51-76

〔学会発表〕（計　４件）

１　安西眞、アキレウスの盾の描写とアキレウス、第９回フィロロギカ研究集会、２００９年１０月１７日、東京大学（本郷）

２　安西眞、Homer and Hesiod, 北海道大学＋古典文献学研究会主催、北海道大学夏期古典文献学国際研究集会、２０１１年７月３１日、北海道大学

３　安西眞、『イリアス』9.182-195、第１１回フィロロギカ研究集会、２０１１年１０月１５日、東京大学（駒場）

４　安西眞、Homer and Hesiod on Two Societies: Hellenes and Barbaroi, 韓国ギリシアローマ協会主催第６回国際研究会、2011 年 10 月 22 日、ソウル大学

〔図書〕（計　２件）

１　安西眞ほか、北海道大学出版会、2010, 296（253-275）

２　安西眞ほか、財団法人国際高等研究所、近代精神と古典解釈、2012, 320（163-190）

６．研究組織

(1)研究代表者
安西　眞（ANZAI MAKOTO）
北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90143320

(2)研究分担者
（なし）

研究者番号：

(3)連携研究者
（なし）

研究者番号：